

脳血管疾患患者に対する入院早期からの更衣動作の獲得に向けた取り組み ～病棟内更衣訓練を朝・夕実施して～

森田名都¹⁾ 河原万理恵¹⁾ 伊賀 雄¹⁾ 橋本卓郎¹⁾ 西田由紀子¹⁾ 水口大輔²⁾ 福田哲也²⁾
大井弥生¹⁾ 山口隆夫¹⁾ 中川康江³⁾

- 1) 国立病院機構鳥取医療センター看護部 9 病棟
- 2) 国立病院機構鳥取医療センターリハビリテーション科
- 3) 国立病院機構鳥取看護大学看護学部看護学科

Initiative to realize dressing skills from early hospitalization for patients with cerebrovascular disease

—Dressing training in the ward in the morning and evening—

Natsu Morita¹⁾ Marie Kawahara¹⁾ Takeshi Iga¹⁾ Takuro Hashimoto¹⁾ Yukiko Nishida¹⁾
Daisuke Mizuguchi²⁾ Tetsuya Fukuda²⁾ Yayoi Ohi¹⁾
Takao Yamaguchi¹⁾ Yasue Nakagawa³⁾

- 1) The 9th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center
- 2) Department of Rehabilitation, NHO Tottori Medical Center
- 3) Department of Nursing, School of Nursing, Tottori College of Nursing

要旨

A 病院 B 病棟は、脳血管疾患や骨折後の患者を主に対象とした回復期リハビリテーション病棟である。回復期リハビリテーション病棟協会では、看護援助の目標を掲げている。その中で、B 病棟では更衣に介助が必要な患者に対して、朝・夕の更衣が実施できていなかった。そのため、昨年は入院中の脳血管疾患患者 3 名に対して、更衣動作を中心とした病棟内 ADL 訓練を 1 日 2 回、1 ヶ月間実施した。しかし、入院後から更衣訓練開始までに 3 ヶ月以上経過しており、すでに ADL に大幅な改善がみられていたことから、ADL の向上が更衣訓練によるものなのか、明らかにすることが難しかった。また、研究対象者が 3 名と少なく、十分なデータを収集することも難しかった。

そこで今年は、更衣動作に介助が必要な患者に対して、入院 1 週間程度（入院早期）から更衣を中心とした病棟内訓練を行い、その結果を分析・検討し、入院早期から長期間にわたり更衣訓練に取り組むことで訓練量が増加し、更衣動作の向上・獲得に繋がる。更には、身体機能の向上を促すことができることが示唆された。鳥取臨床科学 12(2), 79-84, 2020

Abstract

Ward B of Hospital A is a convalescent rehabilitation ward mainly for patients with cerebrovascular diseases and bone fractures. The Kaifukuki Rehabilitation Ward Association has set goals for nursing support. In Ward B, it was not possible to perform dressing in both the morning and evening for patients who needed assistance in

changing clothes. Therefore, last year, three hospitalized patients with cerebrovascular diseases underwent activities of daily living (ADL) training with a focus on dressing in the ward, twice daily during a one-month period. However, since more than three months had passed from admission to the start of dressing training and ADL had already significantly improved, it was difficult to clarify whether the improvement in ADL was due to dressing training. Moreover, it was difficult to collect sufficient data due to the small study sample (n=3).

Therefore, during the present academic year, we conducted in-ward training centered on dressing from about one week of admission (early hospitalization period) for patients who needed assistance for dressing. Analysis of the results indicated that by engaging in dressing training for a long period of time from the early stage of hospitalization, patients were able to undergo more training, enabling them to acquire dressing skills and to improve such skills. The results also suggested that such training could promote the improvement of physical function. Tottori J. Clin. Res. 12(2), 79-84, 2020

Key words: 回復期リハビリテーション, 更衣訓練, 脳血管疾患, 日常生活動作 (ADL), 機能的自立度 (FIM) 回復期リハビリテーション, 更衣訓練, 脳血管疾患, 日常生活動作 (ADL), 機能的自立度 (FIM) ; convalescent rehabilitation, dressing training, cerebrovascular disease, activities of daily living (ADL), functional independence measure (FIM)

はじめに

A 病院 B 病棟は回復期リハビリテーション病棟であり、自宅退院に向け、日常生活動作（以下 ADL と略す）の向上を目指しリハビリテーションを行っている。B 病棟では、脳血管疾患の後遺症による片麻痺や高次脳機能障害の他、認知症のある患者もおり、ADL に介助が必要な患者が多い。回復期リハビリテーション病棟協会による「回復期リハビリテーション病棟 10 か条」では、看護師が行う看護援助の目標を掲げており、更衣に関しても「日中は普段着で過ごし、更衣は朝夕実施しよう」と明記されている。B 病棟では更衣は入浴日（週 2～3 回）と汚染時にしているのみであり、朝・夕 2 回の更衣実施に至っていない。

更衣動作の獲得には、麻痺の程度、座位保持能力や立位保持能力の程度が大きく関係している。また、更衣動作は日常生活においても必要な動作であり、更衣以外の ADL の向上に繋がると考えられる。

また、昨年¹⁾は、更衣を中心とした病棟内訓練によって ADL が向上することを明らかにしようとしたが、昨年の研究対象者が皆、入院後から更衣訓練開始までに 3 ヶ月以上が経過し、すでに ADL に大幅な改善がみられていた。加え

て、昨年は研究対象者数が 3 名と少なく、十分なデータを収集することが難しかった。

今年は、更衣動作に介助が必要な患者に対して、入院 1 週間程度から更衣を中心とした病棟内訓練を行い、朝・夕に更衣することの成果を分析する。

I. 研究目的

脳血管疾患後遺症により更衣動作に介助が必要な患者に、入院早期に更衣訓練を行うことで、ADL へ与える変化の検証を目的とする。

II. 研究方法

1. 研究期間: 20XX 年 6 月～20XY 年 3 月 31 日.
2. 研究対象: 研究の主旨に同意が得られた患者で、脳血管疾患により B 病棟に入院中で、入院時の機能的自立度評価表（以下 FIM と略す）の「している ADL」の運動項目の点数が 40 点未満、かつ認知症スクリーニング検査（以下 MMSE と略す）が 22 点以上の患者。または MMSE が 22 点以下でもナースコールが押せる、危険行動がない等、認知機能の低下によって病棟生活を送ることが困難ではなく、会話での意思疎通が可能な患者を対象者とした。

FIM の「している ADL」とは実際に病棟にお